

# エンカウンター（ENCOUNTER）

第 125 号

平成24年9月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（4）

第9講 問題の提出（3）

## 主の名を呼ぶ

神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり、信仰に至らせる。これは、「信仰による義人は生きる」と書いてある通りである。  
(ロマ書1・17)

内村先生は、この現れ方（1章17節の「信仰に始まり、信仰に至らせる」という箇所）について説明され、「信仰によって受け、信仰によって保ち、信仰によって完成する」、これが「信仰から信仰まで」であると言われました。私は、この後の二つの「信仰」という文字を、「主の名を呼ぶ」というように改めたい。ですから、受けるのは信仰、それを保ち、それを完成するのは、「主の名を呼ぶ」行です。受けて、主の名を呼んで保って、主の名を呼んで完成する。これが、私のキリスト教を「恵心流キリスト教」という所以です。信じるということは難しい。それを続け、それを完成することはもっと難しい。人間にはほとんど不可能です。我々の心には、いつも妄念が満ちておりますから、ロマ書10章10節を読んで下さい。そこには「心に信じて義とされ、口に言い表わして救われる」と書いてあります。この口で言い表わすというのが、これがすなわち、神から頂いた特別な恵みの行です。これはやさしい。誰にでもできる。人は誰にで

もできる行をおろそかにします。人間にとって最も大切なこと、自分に与えられた義務をつくすという、そういう誰にでもできる行をおろそかにします。人間にとって最も大切なこと、自分に与えられた義務を尽くすという、そういう誰にでもできることをせずに、怠けている。そして、他人の目のちりをとることばかりを考えている連中が多い。まず、自分の目のうつばりを先に取り給え！

石館先生の御母堂は、旧教の信者でありましたが、常人では辛抱できない程の不幸な境遇に直面された時も、「主よ、あわれめ」と、主の名を呼んでそれを切り抜けて行かれたと聞きます。普通の人なら離婚して逃げていくでしょう。この頃の人間は、自分の利益、自分の快樂ばかりを求めているのですから。逆境から逃げずに、離婚もせずに、「主よ、あわれめ」と主の名を呼んで耐えて行かれた御母堂に対して、私は無限の敬意を持っています。この「主の名を呼ぶ」ということは、万人に可能です。神はその行を人類に与えられた。そうですから、何時もこの教会では、ロマ書10章の1-13節を必ず読むようにしています。ご了承願いたい。

(P.77)

## 贖いを保ち、完成するのは主の御名を呼ぶこと

神の義、すなわち、贖いというものは、「信仰」によって受け、そして「主の名を呼ぶ」ことによって保つ。贖いを受ける時は信仰、そして、それを保ち、完成するのは主の名を呼ぶこと。言い換えれば、信仰に始まって、主の名を呼ぶことに終る。私はそう解釈します。これは、天国でパウロ先生に叱られるとは思いません。

例が適当でないかもしれませんが、明治 38 年 5 月、バルチック艦隊が日本にやってきた。私は、当時小学校 3 年生。その時の日本海海戦によって、日露戦争が終結したことは君達も知っているでしょう。東郷司令長官が、大本営に「天気晴朗なれども波高し」と報告して始まった戦いが、予期しない大勝利に終わった。その時、東郷長官は、「この海戦に勝てたことは、これは将兵の力ではなく、ひとえ

に天皇の御陵威<sup>みいつ</sup>のいたすところ」と報告しました。「天皇の御陵威のいたすところ」とは、日本国民全体の善行の結果であって、我々軍人によって勝ち得たものではない、あんまり立派に勝ち過ぎて、将兵は喜びのあまり、手の舞い足の踏むところを知らない程であった、と報告したと言われています。人は喜びの心の状態を表す時に、バンザイをします。喜びは心の状態、バンザイはその現われ、すなわち「outcome」です。我々が本当に信仰が分かったら、トマスのように「我が主よ」と、主の名を呼ぶようになります。主の名を呼ぶことは、信仰の一種です。しかもこれは、神から、賜った行いです。そして、この言葉は「祈り」ともなります。宜しいですか！

(P.79)

## 難信易行

要するに、本日学びました「信仰」、「贖いを信じること」は極めて難しい。信じることは誰にでもできるから非常に易しいと、どの注釈書にも書かれていますが、ノー！ ベリー・ディフィカルト！極めて難しい。度々申し上げる通り、それは、我々にその欲望がないからであります。山海の珍味も、食欲のないものにはナンセンスです。信仰で救われることは簡単のようですが、これは難信の法です。いわんや、この信仰を持ち続けることは、人間にとっては不可能です。ひとえに聖霊の御助けによる。そしてそれは、我々の「称名」となって現れる。「称名」であれば、誰にでも可能です。

このままで 我が主イエスの名を呼べば

我は知らずも 主ともに在す

(小西先生自作の歌)

「主の名を呼ぶ」ということは、神から賜った妙行です。我々のような凡夫は、ひとえに、この神から賜った行によって、信仰を保ち、信仰を完成することができる。これが私の経験です。これを、私は恵心僧都から学びました。恵心僧都は、救い主の名を呼ぶことによって、彼の信仰を完成した。それ故、私の信仰を「恵心流キリスト教」と言います。

恵心僧都は、数え年 73 歳の時、九条右大臣の請によって、阿弥陀経を講義した。春 3 月と書いてありますから、ちょうど今頃の時候でしょう。...73 年間の仏教の研学、大蔵経数千巻を数回読破して、

彼の<sup>うんちく</sup>蘊蓄を傾けて、日本の有力者を前にして、この阿弥陀経を講義された。私も、満 72 歳で、この春 3 月に、私の尊敬する兄弟姉妹の前で、ロマ書 1 章 17 節の講義をなし得たことを感謝します。そして私は、恵心僧都が阿弥陀経をお信じになられたごとく、私もロマ書を信じたい。

(P.80)

## 自分は罪びと、滅ぶべき者

自分の傲慢は、自分では分かりません。神から与えられる真理の御霊によって、初めて分からされるのです。これを悔い改めと言う！この時に、自分自身に対する見解が一変します。「自分は今までは普通の人間だと思っていたが、実はそうではない、自分は罪人である、自分は滅ぶべきものである、神の怒りが自分に向かっている」と、こういうことを分かったものをクリスチャンと言う。「あなた方は、いや、君は罪人であって、滅ぶべき者だ」などと言うのは、言う方もいやなら、言われる方もいやです。しかし、牧師が教会へ来た人に「君は偉い、教会へよく来てくれました」などと言ってご機嫌をとっているようでは、それは教会ではない。教会という場所は、「君は滅ぶぞ、君は罪人であって滅ぶべき人間だぞ」ということを教える所です。そして、「君は偶像崇拝者だぞ」ということを教える人、それを伝道者という！「自分が罪人であって、滅ぶべき人間である」ということが分からなければ、何十年教会へ来ていても聖書の真理は分かるはずはありません。分かる道理がない。食欲のない人に山海の珍味を出してもナンセンスです。

諸君！ 胸に手を当てて、よく考えて見て下さい。諸君は、この人生において、何を最も大切にしていますか。それは、自分自身でしょう。自分自身を最も大切だと思っているものを、偶像崇拝者という！すなわち、神ならざるものを神としている。ピリピ書3章19節には、「彼らの神はその腹」と書いてあります。すなわち、「貪る心、これ偶像崇拝なり」とパウロは言っているのです。...

諸君、私の言うことが聖書に適っているか、あるいは間違っているか、虚心坦懐に聖書を読んで見給え。私は、この22年間、君達のおかげで聖書を読ませて頂きました。そして来世におけるこの最後の審判について学びました。キリスト教というものは、甘っちょろいものではない。内村先生は「愛というものは、柔らかなものではなく、岩石のごときものだ」と言われました。

(P.87)

## 「万人は罪びとである」これも信仰

神を信じない時に、我々に神の怒りが望むということを知る、これは信仰です。ロマ書の1章18節から3章20節までに「万人は罪びとである」と書いてありますが、これについても、我々は理性をもってしては知ることはできない。これも信仰です。我々は、ロマ書3章21節から8章までに説かれているキリストの贖いを信じるのと同じように、その同じ信仰をもって、我々はこの1章18節から3章20節までの「万人は罪人である」との真理を信じるのであります。これは信仰です。ロマ書は信仰の書です。始めから終わりまで信仰であります。本日のレッスンでは、パウロは「君たちは偶像崇拜に陥っている」と、異邦人を責めました。...

私は、数々の偶像の中でも最大の偶像は我々の「自己」であると思います。我々は自分を偶像としています。なぜなら、やはりわれわれは自分自身が一番大切ですから、そのためパウロは、我々異邦人の神とは我々の腹である、その貪る心が偶像崇拜であると言いました。私は、「自己」以外の偶像として、もう一つ大きなものは、物質、金銭であると思います。これは現代の人間が崇める最大と言ってもよい程の偶像であります。そしてもう一つの偶像は科学です。科学とか学問も、偶像の一つと言って宜しいと私は思います。この教会には、大科学者にして信仰のある石館兄弟がおられて、科学を偶像とすることに対して大いに警戒を下さっていますから、我々の教会は非常に幸福であります。多くの教会は、この科学のために毒されています。科学で説明真理は信仰しないという神学がこの頃はやっています。

( P.92 )

## 第 11 講 異邦人の罪 ( 2 )

### 感謝とは、おかげであると認識すること

神を認めないで神に感謝していないこと、これが偶像崇拜であることは前回学びましたが、諸君はこれまでに感謝したことがありますか。私も、この 70 年間そのことを知らなかった。感謝の意味が少しわかったのは、最近この第 1 段についてのアルトハウス先生の注解書を読んだ時です。この教会には語学のできる人が多いので、私は原文のまま申し上げます。

Danken heist seine Abhaengigkeit anerkennen. (感謝とは、おかげであるということ認識することである)。

私は、70 歳にして、この言葉を初めて聞きました。勿論、感謝という言葉はこれまでも聴いておりましたが、このアルトハウス先生の口マ書 1 章の偶像崇拜に関する講義において、私は感謝ということが分かった。英語でいえば、「thankfulness」(感謝)とは「dependence」(依存)ということをして「recognize」(認識)することだと言う。諸君！これだけは覚えておいて下さい。すなわち、自分は神の賜物に依存せずには生きられない者だということ。感謝とはこれが分かることあります。

私は、70 年の生涯において、初めて感謝ということが分かった。私は、今まで感謝すると言っては来ましたが、感謝していなかった。勿論私は、未だに感謝していません。感謝してはいないが、感謝とはどういう意味であるかということが分かりました。それは、アルトハウス大先生の言葉を読んだ時に、自分の肉体というものは、太陽、空気、水、食物、睡眠などに、ひとえに (entirely) に依存 (depend upon) しているということが分かったのです。それらは、すべて神の賜物であります。そして、このことが分かることを「信仰」と言うのであります。

## 罪が分かるということは、福音が分かるということ

この罪の問題が分からなければ、キリスト教は分かりません。キリスト教は、善悪、正義不正義の問題の解決にあります。教会という所は、教会に来てくれる人に牧師が愛想を売るような甘い箇所ではありません。教会は、我々が滅ぶか生きるかの問題を教えてもらう所です。そして、この罪というものは、我々に真理の御霊が臨むことによって、自分がこういう姿であることが、はっきりと示されるのであります。

内村先生の言葉の通り、聖霊は終生徐々に降るとすれば、我々に真理の御霊が降るに従って、この大事が明かになってきます。初めはぼんやりとしていて分かりません。しかし、我々が福音に接するにつれて、すなわち、真理の御霊が降るにつれて、我々の姿がこの通りであることが、次第にはっきりとしてくるのであります。

宗教は他人の問題ではありません。己自身の問題です。諸君！ ここに来るのは他人のためではない。自分自身の為に来て下さい！ この罪の指摘は、福音の裏です。この罪が分かるということが、福音が分かるということです。これが分からないということは、福音が分からないということあります。

( P.102 )



## 第 12 講 ヌダヤ人の罪（ 1 ）

### 私の福音理解の根底

ロマ書 3 章 21 節は、旧い訳では「今律法の外に神の人を義とし給ふことは現れて、律法と預言者とはその証しを為せり」となっています。この「律法の外に」という箇所を、(内村)先生は「我々の律法道德とは無関係に、神が人を義とし給う事は現れた」と仰せになりました。私は、その時に初めて、我々の律法道德とは、すなわち、我々の行いとは無関係に神が人を義とし給うという、その福音の意義が分かり、そのことが私の心に深く刻み込まれました。丁度昨日が 50 年目の記念日にあたります。

内村先生が、当時ドイツ式鉄筋コンクリートの建物であった大手町の市立衛生会館でお話しになったその日の光景が、昨日のこのように思い出されます。この時に分かったことが、私の福音理解の根底をなしています。このことは、たびたび申し上げておりますが、本日は昨日の記念日に最も近い日曜日ですので、もう一度申し上げました。諸君も、私から聞いたことの殆どはお忘れになっても宜しいが、「神が我々を救い給うのは、我々の行ない、我々の心の状態によらず、ひとえに、イエス・キリストの十字架の贖いによって救われ、永遠不滅の命を頂く」というこの福音の真理だけは、どうか覚えておいて頂きたいと思います。そして、それがまた、諸君の生命となることができますように。これが、私がロマ書を諸君に講義している目的であります。

( P.106 )

## 神はその業にしたがって報いられる

神は、おのおのに、そのわざに従って報いられる。

(ロマ書第2章6節)

この6節が、本日パウロが主張するところの根本的原理であります。神は我々の業<sup>わざ</sup>によって報いられるということを、我々は神の正義と申しておりますが、これこそは神の基本的、根本的な真理であります。神の救いも、したがって、福音の真理も、この上に立っている。神は我々の行いによってさばき給う。これが聖書の根本的主張であります。これは、信仰によって救われるという原理と一見矛盾するように見えます。ある学者は、この矛盾を説くことは不可能であると言明しています。...

内村先生は、これに対して、この問題は難しいけれども、率直に自分の考えを述べると仰せになって、次のように説明されました。すなわち、「真の信仰には必ず善行が伴う。それ故、行いによってさばかれるというそのさばきの時に至って、本当の信者は、信仰から現われた善行によって救われる。...愛によって働く信仰とガラテヤ書にあるが、「人をゆるすということを伴う信仰でなければ、本当の信仰ということはできない。であるから、信仰によって救われるということは、信仰から出てくる善行によってさばかれると言い直しても少しも矛盾しない。必ず信仰には善行が伴っている。故に、業によってさばかれるという原理は、信仰によって救われるという原理と矛盾しない」と。...

信者自身の主観的状态においては、トマスが、信仰を与えられた時に「我が主よ、我が神よ」と言ったように、「我が主イエスよ」と、主の名を呼ぶことが、我々が信仰を与えられた時に出て来る行為と見て宜しい。そうですから、我々は「我が主イエスよ」と言い表わす善行によって、滅びから免れる。それが、本日司会者が読みました「主の御名を呼び求めるものは、すべて救われる」(ロマ書10章13節)と云うことでもあります。(P.109)

## 最後の審判

聖書を学ばば学ぶほど、最後の審判、すなわち、人間が永遠に救われるのか滅びるのかということが、聖書の根本問題であることが分かります。善行には善の報いがあり、悪行には悪の報いがあるということは、すでに現在から始まってはおりますが、そのことが明瞭に現れるのは未来、すなわち、最後の審判の時であると聖書には書いております。聖書は、常に未来を見、永遠を見ている。これが、人間の道徳と根本的に違うところあります。聖書の倫理道徳は、いつもこの永遠不滅の問題を標準としています。

本日の内容は、人は行いによってさばかれるということあります。我々は、現在すでにさばかれつつある。我々の毎日の行為がいかにかに重大なものであるかが、これで分かります。我々の日々の行いは平凡に見えますが、それは「我々の永遠を決定しつつある日々」であります。行いによってさばかれるというこの根本原理から、この結論が出てくる。毎日何をなしているか、この行いが、我々の永遠を決定します。

「主の名を呼ぶ」ことは、簡単にして誰にでもできる平凡な行いではありますが、私は、これを毎日行うことがいかにかに重大であるかを思うのであります。永遠の生命を獲得して、これを成長させるには、この「主の名を呼ぶこと」、「主を仰ぎ見ること」は不可欠です。ですから、この二つの行は、我々が神から賜った行、妙行であります。

それから、次に大切な行は、「自分の目の前に置かれた義務をなす」ことであります。これもまた誰でも為し得る行です。我々は永遠の重大な責務を果たすために、遠い所を見る必要はありません。現在の、只今の、自分を見れば宜しい。現在、自分の目の前に置かれていること、なすべきこと、これが神の意思であります。我々の永遠の運命は、この神の意思をなすか、なさないかによって決まる。我々がいかにかに真剣に毎日の仕事をしているか、これが、永遠のことを考えるときには大切であります。そのことは、だんだんと分かってきます。

(P.113)

